

第2章 実践編



複式学級における基本的な学習過程に沿った実践例（5・6年算数）

大村市立黒木小学校 第5学年（4名）・第6学年（2名）

■児童数（全14名）

<H17年度>

	1・2年	3年	5・6年
人数	4	4	6

- 郡川の上流菅瀬ダムの湖畔に位置し、毎日小鳥のさえずり、川のせせらぎが聞こえる自然豊かな学校である。
- 地域の産業の中心は農業であるが、多くは兼業である。

■複式授業づくりの視点

- 複式授業における基本的な学習過程に沿った授業を行うことにより、課題把握や課題解決の過程を直接指導することができる。直接指導によって、課題への子ども一人一人の反応を見取ることができるため、個に応じた指導を十分に行うことができる。これにより、子どもに本時の課題を明確につかませ、学習の見通しをもたせることができる。
また、間接指導につながる指導も行うことができるので、自主的・主体的な学習の充実も図ることができる。

■視点に対する具体的な手だて

○直接指導の手だて

- ① 授業開始後、下学年である5年生に「つかむ」過程を直接指導する。問題文を読み取らせるためには、文の中から、わかっていることやたずねていることに気付かせ、理解させることが大切である。少人数であるため、課題への個々の反応を十分見取り指導できるので、本時の課題を確実に理解させることができる。この時、6年生には前時の練習問題のプリントで学習を深める場を設定する。
- ② 「確かめる」過程も直接指導する。これにより、「調べる」過程で考えを十分にもてなかつた子どもにも再度、本時の学習を理解させる機会をもたせることができる。
- ③ 間接指導に入る前に学習の手順を確認し、必要なことは板書しておくようにする。また、学習の取り組み方や進め方、深め方などの学び方を日ごろから徐々に身に付けさせるようにすることも大切である。このような手だてが間接指導における自主的・主体的な学習を支えることにつながる。

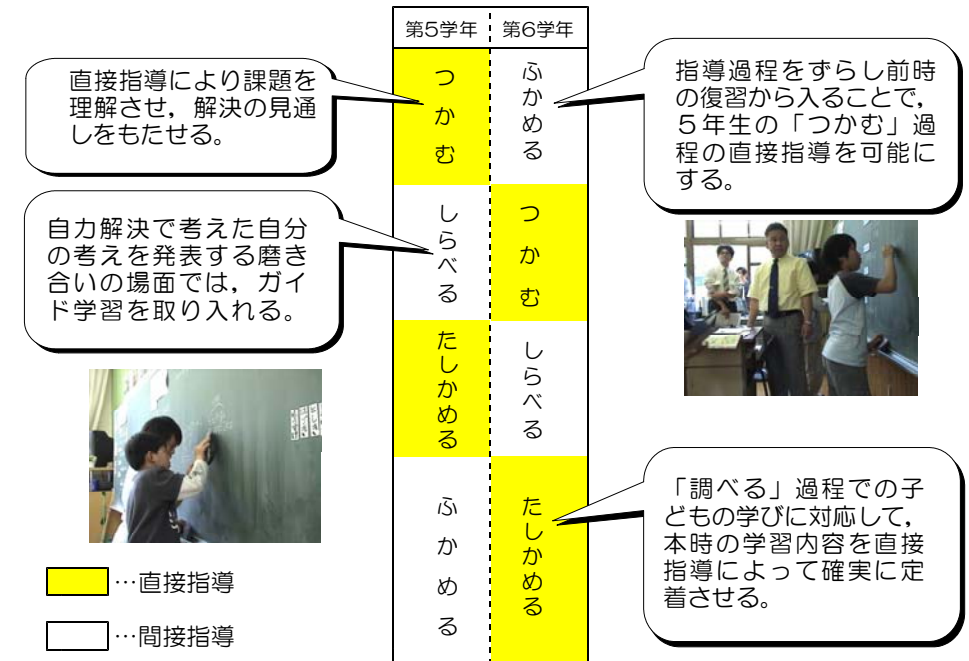
○間接指導の手だて

- ① 「調べる」過程は間接指導を行い問題を自力で解決させる。この後の

磨き合いでは、子どもが自主的・主体的に活動できるように「ガイド学習」を取り入れる。

- ② 「深める」過程も間接指導を行い問題を自力解決させることにより、習熟を図る。

【指導過程の概略】



■プラス発想のポイント

- 「ずらし」を行うことによって、両学年とも「つかむ」過程を直接指導することができ、課題を確実に理解させ、間接指導の充実を図ることができる。
- 「調べる」過程は、間接指導となる。自力解決の時間が必ず保障されることによって、前時の学習や今までの経験等をもとに、自主的・主体的に課題を解決しようとする姿勢が育つ。
- 磨き合いの場面では「ガイド学習」を取り入れる。子ども自らが学習を進め、発表したりまとめたりすることによって、自主的・主体的な学習態度や表現力等を育てることができる。

【指導の概要】

5年「小数のかけ算わり算を考えよう」 6年「分数のたし算ひき算を考えよう」

第5学年のねらい

○小数に整数をかける乗法計算の意味とその計算の仕方について理解し、用いることができる。

第6学年のねらい

○分数の通分についての理解を深め、異分母分数の減法計算をすることができる。

第5学年 学習の展開	教師	第6学年 学習の展開
<p>①つかむ (10分) ○課題をつかむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>3.6×7の計算の仕方を考えよう。</p> </div> <p>②しらべる (10分) ○問題を解く。 ・計算の仕方を自力で考える。 【予想される方法】 ・0.1をもとにして考える。 ・10倍して整数になおして計算し、10でわる。 ・筆算で計算する。 ○考えを発表する。</p> <p>③たしかめる (10分) ○まとめる。 ・筆算の仕方を考える。 ・筆算の仕方をまとめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>・3.6の6の下に7を書く。 ・整数のかけ算と同じように計算する。 ・かけられる数にそろえて、積に小数点を打つ。</p> </div> <p>④ふかめる (15分) ○練習問題を解く。 ○ふりかえる。</p>		<p>①ふかめる (10分) ○前時の練習問題を解く。 ○ふりかえる。 ・答え合わせをする。</p> <p>②つかむ (10分) ○課題をつかむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>分母がちがう分数の、ひき算の仕方を考えよう。</p> </div> <p>③しらべる (10分) ○問題を解く。 ・異分母分数のひき算の仕方を自力で考える。 【予想される方法】 ・順序よく等しい分数を作り、同じ分母になる分数をさがす。 ・公倍数を用いてさがす。 ・図を用いてさがす。 ○考えを発表する。</p> <p>④たしかめる (15分) ○まとめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>分母がちがう分数のひき算は、通分をして計算する。</p> </div> <p>○ふりかえる。 ・異分母分数のひき算を通分して計算する。</p>
		<p>【次時】ふかめる ○練習問題を解く。</p>

■複式授業づくりにかかるよさ

- 本時は複式の授業に慣れている6年生の学習過程をずらしている。このように、発達段階や複式経験の差などを考慮し、下学年に配慮した学習過程を仕組んだことが複式学級における指導を進めていく上で有効だった。
- 「ずらし」によって、両学年とも「つかむ」過程を直接指導できたので、問題文の中の「わかっていること」「たずねていること」等に気付かせ理解させることができ、学習課題を立てさせることができた。これによって、子どもは前時までの学習内容を想起し、これまでに学んだことを使って本時の問題も解けそうだという見通しをもつことができた。このことが、間接指導において、意欲をもって自力解決へ向かう子どもの姿につながった。
- 「確かめる」過程も直接指導できたので、「調べる」過程で理解が十分でなかった子どもにも再度指導を行うことができた。
- 間接指導に入る前に学習の手順を確認し、必要なことは板書しておくようにした。また、ガイド役の子どもには進め方等を事前に確認しておいた。これにより「調べる」「深める」過程を自分たちで進めることができた。
- 学び方を身に付けられるように、日ごろから少しずつ指導している。特に学習の進め方についてはガイド学習を取り入れ、間接指導時に自分たちで学習ができるようにしている。また、間接指導時の指示を板書したり、話し方やノートの取り方を指導したり、話し合いの深め方を指導したりするなどの手だてを行っている。このようなことが、自主的・主体的な学習ができる子どもに育つことにつながると考える。

多様な考えに出会わせることにより子どもの思考を深めた実践例
(3・4年国語)

対馬市立小綱小学校 第3学年(4名)・第4学年(1名)

■児童数(全23名)

<H17年度>

	1年	2年	3・4年	5・6年
人数	6	3	5	9

○対馬の中心部に位置する海辺の町である。

○漁業が主な産業で、イカやアナゴなどが特産品である。

■複式授業づくりの視点

○子どもたちが、考えを広げたり深めたりして学習のねらいに向かっていけるようにするために、本時において触れさせたい多様な考えを教師自身が把握し、出会わせ方を工夫することで、子どもたちは思考を深め合うことができるようになる。

■視点に対する具体的な手だて

○多様な考えに出会わせる方法Ⅰ

学習上の級友(「学習友達」)の役割をするぬいぐるみ、「小綱太郎」を設定し、その級友からの考えという形で違う考えに意図的に触れさせる。また、あらかじめ用意したものだけでなく、授業の展開から出た新たなヒントやアドバイスを提示することで、思考を一層促すようにする。

○多様な考えに出会わせる方法Ⅱ

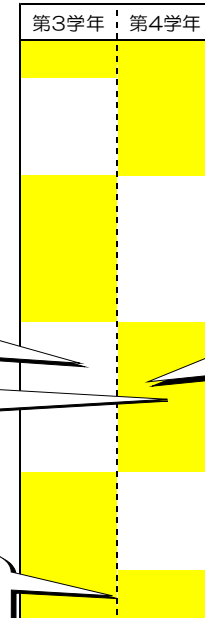
他校の同学年の子どもの発表等をビデオ撮りしたものを視聴させることで違いを認識させ、新たな考えを創出できるようにする。

○触れさせる考えの活用

教師が用意し、授業で出会わせる「小綱太郎」や他校の子どもの考えは、本学級の子どもたちの考えとはできるだけ違うものを提示する。そのことで自己の考えや教材を見つめさせ、思考や表現を広げたり深めたりすることができるようにする。

また、「小綱太郎」のような学習友達の特長を生かして、触れさせる考えの内容については、学習中に表出された子どもの考えによって臨機応変に対応し、一人学びや集団思考の場でより活用できるようにする。

【指導過程の概略】



学習友達による自分と違う考え・意見に出会わせ、揺さぶりの発問をする。

学年1名なので、考えが深まりにくい状況を想定し、用意した他校の同学年の子どもの意見をビデオで視聴させ、思考を促す。

共通の課題について学習した成果を、両学年の子どもたちに発表させ交流を図る。

■ …直接指導



考えが書かれた紙を持たせた学習友達



子どもの思考を揺さぶる内容の考え

■プラス発想のポイント

○複式学級では、学習場面で多様な考えに触れることが難しいと言われるが、学習上の級友(学習友達)の設定や他校の子どものビデオ映像等を活用することにより、多様な考えに触れさせることは可能となる。

【指導の概要】

3年「サーカスのライオン」 4年「ごんぎつね」

第3学年のねらい

○火事が起きたときのじんざの気持ちを考える。

第4学年のねらい

○ごんがうたれたときの兵十とごんの気持ちの移り変わりを考える。

第3学年 学習の展開	教師	第4学年 学習の展開
①つかむ（3分） ○ねらいを確かめる。 ○課題を考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 男の子を助けたいと思っている じんざの気持ちを考えよう。 </div>		①つかむ（8分） ○ねらいを確かめる。 ○栗を持っていくごんや火薬をつめる兵十の気持ちを考え、気持ちがすれ違っていることをとらえる。 ○課題を考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> ごんと兵十の気持ちがどのように 変わっていくか読み取ろう。 </div>
②しらべる（12分） ○方法を考える。 ○一人学びをする。 ○課題に迫るために自分が選択した方法を黒板に掲示し、取り組む。		②しらべる（15分） ○方法を考える。 ○一人学びをする。 ○課題に迫るために自分が選択した方法を黒板に掲示し、取り組む。
③たしかめる ○グループ学びをする。 ○二人組で深め合う。		③たしかめる ○グループ学びをする。 ※学年一人のため、小綱太郎からの他の考えを教師が準備しておく。 ○学習友達のワークシートと自分の読みを比べる。
④ふかめる（30分） ○「火事だ」と聞いてからのじんざの気持ちの動きを押さえる。 ※小綱太郎の持つカードの中に子どもの思考を揺さぶるような考えを書いておく。 ※揺さぶりの発問をする。 ○消え去ってしまったときのじんざの気持ちを考える。 ○じんざの気持ちを吹き出しに書く。 ○友達と紹介し合う。 ○本時に学習したことや課題について発表し、次時のめあてをもつ。		④ふかめる（22分） ○考えを発表する。 ※自分の考えだけでなく、小綱太郎の考えと結び付けて発表させる。 ※ごんや兵十の気持ちの動きについて考えさせる。 ※T小学校の4年生の意見をビデオで紹介し、考えを深めさせる。 ○本時に学習したことや課題について発表し、次時のめあてをもつ。

■複式授業づくりにかかるよさ

○ 本時では、学習友達（「小綱太郎」）と命名した仮想の級友の考えを両学年が共に活用した。教師が用意し授業で出合わせる「小綱太郎」の考えは、子どもの思考を深めることを意図した内容にした。

3年生では深める過程で、自分たちの読みを確かなものにさせる意図で使い、子どもの読みとは相反する読みに出わせ揺さぶりをかけた。その読みに反論するために、さらに文章をじっくりと読む子どもの姿が見られた。

4年生は1名なので、調べる過程で他の友達の考えとして「小綱太郎」の考えに触れさせた。また、深める過程においては、他校の同学年の子どもの意見を映像で紹介した。違う考えに触れさせることで、自分の考えと比べて思考し、どちらが妥当な考えだろうかという意識をもちながら関連する叙述を再度読み直し、新たな考えを獲得することができていた。

子どもたちは、「小綱太郎」や映像からもたらされる考えはどんな内容だろうと興味を示し、その内容をじっくりと吟味し自分の考えと比べる様子が見られた。このような学習の工夫の中から、間接指導の場面で子どもは自分で学習を深める目的で「小綱太郎」の考えに触れ、自分たちで考えを深めることができた。

○ 両学年ともに動物が主人公の「命」にかかわる物語文であったので、「命と心のふれあいについて考え伝え合おう」という類似した単元内容を設定し、両学年の同時導入・同時終末を行うことができた。特に同時終末の過程では、共通課題について感じたこと・学んだことを両学年の子どもたちが発表することで、他学年の学びや思いに触れさせることもできた。



教師が両学年の学習状況を見取ったり、個別指導を行ったりできる時間を設定した実践例（3・4年算数）

雲仙市立岩戸小学校 第3学年（2名）・第4学年（5名）

■児童数（全31名） <H17年度>

	1年	2年	3・4年	5・6年
人数	7	4	8(7+特1)	12

○山間部にあり、季節に応じた花々に囲まれる。

○林業が中心で多くが関連した仕事に従事している。

■複式授業づくりの視点

○ 複式授業の基本的な学習過程では個別指導を必要とする子どもにタイミングよく指導できないことがある。そこで、両学年の子どもを同時に指導することができる時間を設定することにより、個別指導を必要とする子どもに対応する場を保障できると考える。

■視点に対する具体的な手だて

○「調べる」過程への位置付け

両学年の「調べる」過程を重ねることで、教師がどちらの学年も同時に指導することができる時間を生み出すようにする。両学年とも自力解決の時間になるので、ガイド学習を取り入れ、学習を進めていけるようにする。

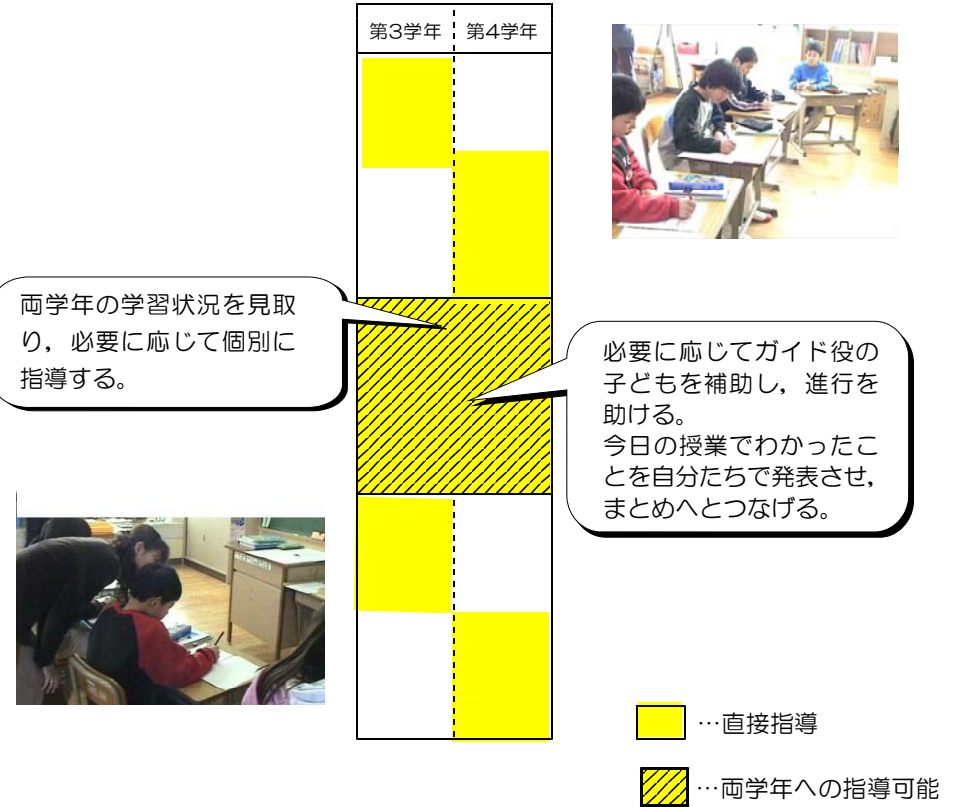
○実態に応じたガイド学習

まず、1時間ごとに、その時間の学習展開に合ったガイドカード（進行表）を渡してガイド役の役割に慣れることから始める。その後、基本的な進め方を示した「基本のガイドカード」と単元や1時間ごとの学習内容に応じた「補足カード」の両方を準備する。

○フォロアーへの指導

ガイド学習の充実のためには、フォロアーを育てることが大切である。そこで、「ガイド役の話を最後までしっかり聞く」「わかったら必ず返事をする」等指導の充実を図り、継続的に指導する。

【指導過程の概略】



■プラス発想のポイント

- 子どものみで学習活動ができる時間を設定することにより、教師は一人一人の学習状況に応じたきめ細かな指導が実現できる。
- ガイド学習を進める中で、すべての子どもがガイド役やフォロアーを経験することで、友達と協力することの大切さを実感することができる。

【指導の概要】


3年「かけ算の筆算」 4年「式と計算」


第3学年のねらい

○(2位数)×(2位数)の計算の仕方を、既習事項を使って考える。

第4学年のねらい

○2段階構造の問題を、()を用いて1つの式に表すこと及びその式の計算順序を理解する。

第3学年 学習の展開	教師	第4学年 学習の展開
<p>①つかむ (12分)</p> <p>○学習問題と本時のめあてをつかむ。 ○答えの予想と、解決方法の見通しを立てる。</p> <p>12×23の計算の仕方を考えよう。</p> <p>②しらべる (13分)</p> <p>※教師は個別に指導する。</p> <p>○12×23の計算をする。</p> <p> $\begin{array}{r} \text{A} \quad 12 \times 20 = 240 \\ \quad 12 \times 3 = 36 \\ \hline 240 + 36 = 276 \end{array}$ $\begin{array}{r} \text{C} \quad 12 \\ \quad \times 23 \\ \hline \quad 36 \\ \quad 240 \\ \hline 276 \end{array}$ </p> <p> $\begin{array}{r} \text{B} \quad 12 \times 2 = 24 \\ \quad 12 \times 3 = 36 \\ \hline 24 + 36 = 60 \\ \text{(誤答例)} \end{array}$ </p> <p>③たしかめる (5分)</p> <p>○12×23の計算方法について話し合う。 ※教師が子ども役になって質問し、答えの予想や前時までの学習に立ち返らせ、正しいやり方に導く。</p> <p>④ふかめる (5分)</p> <p>○今日の学習でわかったことを発表し、それをもとにまとめる。</p> <p>12×23は、23を20と3に分けて計算する。</p>		<p>①ふりかえる (10分)</p> <p>○前時のまとめを読んだりプリントを解いたりすることで、前時の学習を振り返る。 ○答え合せをする。</p> <p>②つかむ (5分)</p> <p>○学習問題と本時のめあてをつかむ。 ○言葉の式を考える。</p> <p>言葉の式と比べながら、式を作るところ。</p> <p>③しらべる (20分)</p> <p>※教師は個別に指導する。 ○言葉の式をもとに問題の数字を使った式を作り、解く。</p> <p> $\left(\begin{array}{l} \text{A} \quad 400 \div 40 + 10 = 8 \text{ (誤答例)} \\ \text{B} \quad 400 \div (40 + 10) = 8 \\ \text{C} \quad 400 \div 50 = 8 \end{array} \right)$ </p> <p>※AやBの考え方が出なかったときは、教師が子ども役になって提示する。 ※Cの考えが出たら、問題の中の数字を使って式にするとどうなるか考えさせる。 ○自分の答えが出たら小黒板に書き、説明の仕方を考える。</p>

 …両学年への指導可能

⑤ふりかえる (10分)
○計算プリントで習熟を図る。

④たしかめる (5分)
○式と方法、答えを発表する。
(主にA、Bの考え方をを用いる。)
※言葉の式に対応しているかを考えさせる。

⑤ふかめる (5分)

1つの式にする時は、先に計算する方に()をつける。

■複式授業づくりにかかるよさ

- どちらの学年にも指導可能な時間を取り入れることにより、自力解決の場面における個別指導の時間を確保することができた。そのことにより、子どもたちも安心して学習に取り組むようになり、自力解決の過程の充実につながった。これまで個別指導が必要な子どもに対しては、授業後に機会を見つけて行うことが多かったが、そういった状況も改善できるようになった。
- どちらの学年も指導できる時間の中で、教師はガイド役を補助することもできた。このように、ガイド役の育成も図ることができる時間となった。
- ガイド学習を通して、ガイド役を支えるフォロアーとなることで、一人一人に「聞く力」が身に付き、友達の話を中心して聞くことができるようになってきた。また、ガイド役を経験することで、わかりやすく話そうと努め、「話す力」も付いてきた。



「同時導入・同時終末」により学習への意欲の喚起を図った実践例（5・6年算数）

吉岐市立三島小学校 第5学年（1名）・第6学年（2名）

■児童数（全46名） <H17年度>

	1・2年	3・4年	5・6年
三島小	4	6	3

○吉岐の南西に位置する大島、長島、原島を合わせて三島と呼ぶ。大島に本校、長島と原島にそれぞれ分校がある。

	1・2年	3・4年	5・6年
長島分校	4	6	8
原島分校	7	3	5

○漁業が中心で、島民の多くが関連した事業で生活している。

■複式授業づくりの視点

○「同時導入」では、両学年の子どもたちが一つの問題を力を合わせて解決するという意欲的な学習が展開できると考える。

また、「同時終末」では、それぞれの成果を具体的に交流し、認め合う場を設定することにより、解決の喜びを味わわせることができると考える。

■視点に対する具体的な手だて

○指導計画の見直し・改善

「同時導入・同時終末」を可能にするためには、両学年の学習内容や指導内容が類似している必要がある。そこで、年間指導計画に基づき、関連を図りやすい内容を精選し、同時期に設定する。

また、子どもの興味・関心を高め、さらに学習の意欲を持続させるために、単元を通して解決していく魅力的なテーマの設定が必要である。

さらに、ドラマチックな演出による提示の方法も学習意欲を高める効果が大きいと考える。

○魅力的なテーマの設定

本実践では、体積（6年）と面積（5年）の学習を関連付け、そこに単元を通して解決していくテーマを設定した。また、学習への意欲付けを図り解決の喜びをもたせるため、課題の提示を「図形魔王からの挑戦状」としたり、両学年の答えが合った時に図形魔王からの挑戦状を解くキーワード（暗号）を渡したりする。

【指導過程の概略】

学習内容を関連付けた問題を提示する。両学年の子どもの解答ができた時点で、キーワード（暗号）を渡す設定にしておく。



教師が子ども役になり、質問したり、聞き役になったりすることにより、子どもの考えを明確にさせ、後の発表につなげさせる。



体積の学習は初めてなので、6年生に新出事項を直接指導する。



答え合せを通して本時の学習内容の理解を把握するとともに、キーワード（暗号）を渡し、意欲付けをする。

■…直接指導

■プラス発想のポイント

○ 関連を図りやすい内容を組み合わせることにより、導入と終末を『ずらさない』指導過程が可能となる。2学年が力を合わせて取り組むゲーム性のある単元の流れを仕組むことにより、授業が活性化し、学習への意欲を高めることができる。

○ 教師が両学年に直接かかわって指導できる時間が増え、本時導入での課題把握の状況や、終末での内容の理解の様子などを直接とらえることができるようになる。

○ 同時終末では、異学年での学び合いが設定でき、一人一人の学びを一層確かなものにするのが期待できる。

【指導の概要】

5年「平行四辺形の面積」 6年「体積」

第5学年のねらい

○既習の図形の求積方法を用いて、平行四辺形の面積の求め方を理解する。

第6学年のねらい

○もののかさの大きさ比べをすることで、体積について理解するとともに、普遍単位の必要性から体積を表す単位（1cm³）について知る。

第5学年 学習の展開	教師	第6学年 学習の展開
<p>①つかむ（12分）</p> <p>○「図形魔王からの挑戦状」を聞く。</p> <p>5年生と6年生で手分けをして、5年生は、わしの「図形の庭」の広さを、6年生は「図形の城」のかさを調べ、それぞれが出した答えの数字を合計すると何になるかを答えるのだ。</p> <p>○問題を読む。</p> <p>○事前に録音した図形魔王からの問題を聞き、復習をする。</p> <p>○課題を考える。</p> <p>平行四辺形の面積を求めるにはどうしたらいいだろう。</p>		<p>①つかむ（7分）</p> <p>○「図形魔王からの挑戦状」を聞く。</p> <p>○問題を読む。</p> <p>○新出事項(かさについての学習)であることの確認をする。</p> <p>○課題を考える。</p> <p>直方体のかさの大きさを比べるにはどうしたらいいだろう。</p>
<p>②しらべる（12分）</p> <p>○方法を考える。</p> <p>[予想される方法]</p> <p>ア 長方形に変形する。</p> <p>イ 二つの長方形にして、後で合わせる。</p> <p>○一人で取り組む。</p> <p>ア 長方形におおすと、縦が4cmで横が7cmなので、$4 \times 7 = 28\text{cm}^2$になる。</p> <p>イ 三角形と三角形をくっけると縦4cm、横2cmの長方形と、縦4cm、横5cmの長方形になり、それぞれの面積を合わせると$8 + 20 = 28\text{cm}^2$になる。</p>		<p>②しらべる（15分）</p> <p>○どれが大きそうかを予想する。</p> <p>○方法を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計算でする。 ・図でやってみる。 ・実物を作ってみる。 <p>○一人で取り組む。</p> <p>A…14個（$1 \times 2 \times 7$）</p> <p>B…18個（$3 \times 2 \times 3$）</p> <p>C…16個（$4 \times 2 \times 2$）</p>
<p>③たしかめる（6分）</p>		<p>③たしかめる（10分）</p> <p>○発表をする。</p> <p>○体積を表す単位（1cm³）と、その</p>

○発表をする。

○マッキーくん（教師が務める学習友達役）の質問に答えたり、発表を聞いたりする。

④ふかめる（5分）

○発表したことをもとにまとめる。

平行四辺形の面積は、長方形に形を変えて求めることができる。

⑤ふりかえる（10分）

○本時の振り返りをする。

○魔王と6年生に向けて説明する。

○答え合せをする。

大きさを知る。

○別の図形についても何cm³になるかを考えさせ、学習内容の定着を図る。

④ふかめる（5分）

○学習内容を確認しながらまとめる。

直方体のかさの大きさを比べるには、1cm³がいくつつあるかで比べることができる。

⑤ふりかえる（8分）

○本時の振り返りをする。

○5年生の発表を聞き、感想を述べる。

○答え合せをする。

■複式授業づくりにかかるよさ

○本授業にかかわっては、「同時導入・同時終末」を可能とするために年間指導計画の検討をし、教材の領域が同じであること、両学年の単元の学習の流れが似ていること、配当時数がほぼ同じであること等から単元構想を行った。なお、系統性を考慮し無理がないように配慮した。それにより学習意欲が高まり、課題解決段階での追究でも深まりが見られた。また終末では、課題解決の喜びを分かち合うとともに満足感を味わうことにもつながった。

○両学年が力を合わせて取り組むゲーム性を意識したテーマを設定することにより、授業が活性化し、学習への意欲を高めることができた。1時間の集中力が高まり、活発に教え合ったり、質問したりする子どもの姿が見られた。

○常に1単位時間で両学年の学習が完結し、本時のまとめを基に次時の問題が出されるというスモールステップによる単元の流れを仕組むことができた。前時の学習を子どもが想起しやすくなり、回数を重ねることに授業展開がスムーズになった。

複式学級において入学間もない1年生に配慮した実践例（1・2年国語）

対馬市立豆酸小学校瀬分校 第1学年（1名）・第2学年（2名）

■児童数（全10名） <H18年度>

	1・2年	3・4年	5・6年
人数	3	3	4

- 学校の周りは緑で囲まれ対馬でも有数のゲンジボタルの生息地になっている。
- 半農半漁の地域で学校の近くに漁港があり、定置網の水揚げで賑わっている。

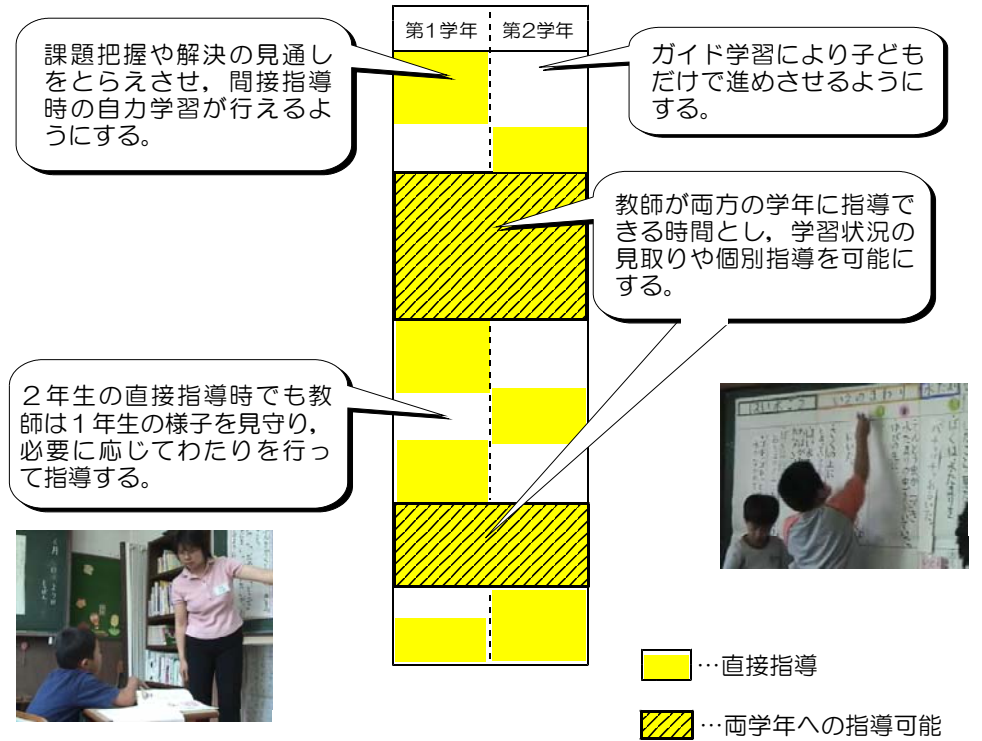
■複式授業づくりの視点

- 1・2年複式学級の学習においては、入学間もない1年生に対する配慮が必要である。教師の直接的な指導場面を多くしたり、各学習過程における学習の仕方を身に付けられるようにかかわったりすることで、学習の成立と充実を図ることができると思う。

■視点に対する具体的な手だて

- 「つかむ」過程でのかかわりを大切にする
授業の始まりは1年生への直接指導から行うようにする。手紙文を書く学習への意欲化を図り、相手意識を十分にもたせることを大切にしたい。また、学習の進め方についても掲示資料を使いながらとらえさせる。
- 1年生を直接指導する場を多くもつ
1年生の学習を確かなものとするため、できるだけ直接指導できる場を設けたい。2年生への直接指導中も1年生の様子を見守り、必要に応じて小わたりを行い指導をする。また、指導過程に教師がどちらの学年へも指導可能な時間を設けることで1年生はもちろん、2年生にも十分に指導ができるようにする。
- 単元の組合せを配慮する
両学年とも「読むこと」の学習を行うと、まだ学習の仕方に慣れていない1年生に、十分なかかわりができないという状況が生じてしまうおそれがある。そこで、2年生が「読むこと」の領域を学習する場合は、1年生は「書くこと」の領域とし、両学年の子どもに十分かかわることが可能になるようにする。

【指導過程の概略】



■プラス発想のポイント

- 1・2年複式学級の学習指導では、入学間もない1年生への直接指導の時間を十分にとれないという悩みがある。しかし、指導過程の組合せを工夫したり、2年生の自主的・主体的な学習の力を活用したりすることで、直接指導できる場を確保できる。
- 指導計画は年間を通してどの学期も同じ考えや要領で編成するものという発想ではなく、「1学期の指導計画」というように、子どもの実態を考慮して編成することも必要である。そうすることで、入学間もない1年生への十分な指導が可能となる。

【指導の概要】

1年「よんでよんで」(作文) 2年「あめの日のおさんぼ」(物語)

第1学年のねらい

○主述の照応や句読点の表記などに注意しながら、相手を意識して文章を書くことができる。

第2学年のねらい

○雨の日の生き物たちの様子や、そのときの「ぼく」の気持ちを読み取ることができる。

第1学年 学習の展開	教師	第2学年 学習の展開
<p>①つかむ(7分)</p> <p>2ねんせいに、おうちやがっこうであつたことをてがみでしらせよう。</p> <p>※手紙文を書くことへの意欲と相手意識をもたせ、学習の進め方や原稿用紙の使い方を確認する。</p>		<p>①ふりかえる(7分)</p> <p>○前時に学習した第1場面の内容を確認する。</p> <p>○前時に学習したことを生かして、第1場面を音読する。</p>
<p>②しらべる(20分)</p> <p>○原稿用紙の使い方に気を付けて文を書く。</p> <p>※2年生に知らせるといふ視点を常に意識するよう働き掛ける。</p> <p>※両学年への指導可能な時間ではあるが、主に1年生へのかかわりに重点を置く。</p>		<p>②つかむ(5分)</p> <p>○学習問題を確認する。</p> <p>○調べ方を確認する。</p> <p>2場面で「ぼく」がしたこと、見たこと、思ったことを読み取ろう。</p>
<p>③たしかめる(13分)</p> <p>※「かきかたのちゅうい」に従って書いているか自分で確かめたり、教師と一緒に確かめたりする。</p> <p>○清書をする。</p>		<p>③しらべる(15分)</p> <p>○「ぼく」がしたこと、見たこと、思ったことが書いてある箇所に線を引き、ワークシートにまとめる。</p> <p>※正しく線を引きシートにまとめているか見取り、個別に指導する。</p>
		<p>④たしかめる(11分)</p> <p>○したこと、見たこと、思ったことを時間の順序を追って発表し合う。</p> <p>○その時その時の「ぼく」の気持ちを考えて、発表する。</p>
<p>④ふかめる(3分)</p> <p>○読む練習をする。</p> <p>○手紙を読んで、2年生に聞いてもらう。</p>		<p>⑤ふかめる(4分)</p> <p>○友達の意見を聞いて、ワークシートに自分がとらえていなかった文を書き入れる。</p> <p>○様子や気持ちを思い浮かべながら第2段落を音読する。</p>

⑤ふりかえる(2分)

○学習の振り返りをする。

⑥ふりかえる(3分)

○1年生の作文を聞き感想を述べる。
○学習の振り返りをする。

●…両学年への指導可能

■複式授業づくりにかかるよさ

- 1年生のつかむ過程で、課題に対する意欲の喚起や学習の手順等の押さえを大切にしたい。このような教師の働き掛けにより1年生は、手紙文を書いて伝えようとする姿勢をもち、書くための手順等を意識しながら学習を進めていくことができた。
- 入学間もない1年生の子どもは、学習に不安を抱えている。なるべく直接指導できる場面を多く設定し、教師がかかわるようにしたこと、1年生は不安を感じることなく1名での学習を進めていくことができた。
2年生への直接指導中も1年生の様子を見守り、必要があればわたって指導を行った。活動が停滞していた1年生に、手紙文を記述する際の留意点を記した掲示物の内容を再度確認させることで、要領をつかんで記述を進めることができた。
このように、教師が寄り添いながら、各学習過程のねらいに沿った活動をきちんと行えるようにすることで、自学習へとつながっていくと考える。さらに、教師がどちらの学年も指導できる時間を設け個別指導ができるようにしたこと、1、2年双方の子どもに対して適宜指導を行うことができた。
- 1年生「書くこと」、2年生「読むこと」と領域を分けた授業を計画し展開したことで、教師が両学年の子どもにかかわることができ、それぞれの学習のねらいに迫ることができた。



類似教材指導により学習の活性化を図った実践例（3・4年国語）

新上五島町立若松小学校 第3学年(6名)・第4学年(6名)

■児童数（全44名）

<H17年度>

	1年	2年	3・4年	5年	6年
人数	3	11	12	10	8

- 西海国立公園の中に位置し、若松海中公園など、自然の景観に恵まれた島である。
- 若松瀬戸の好条件を生かしたハマチの養殖が有名である。

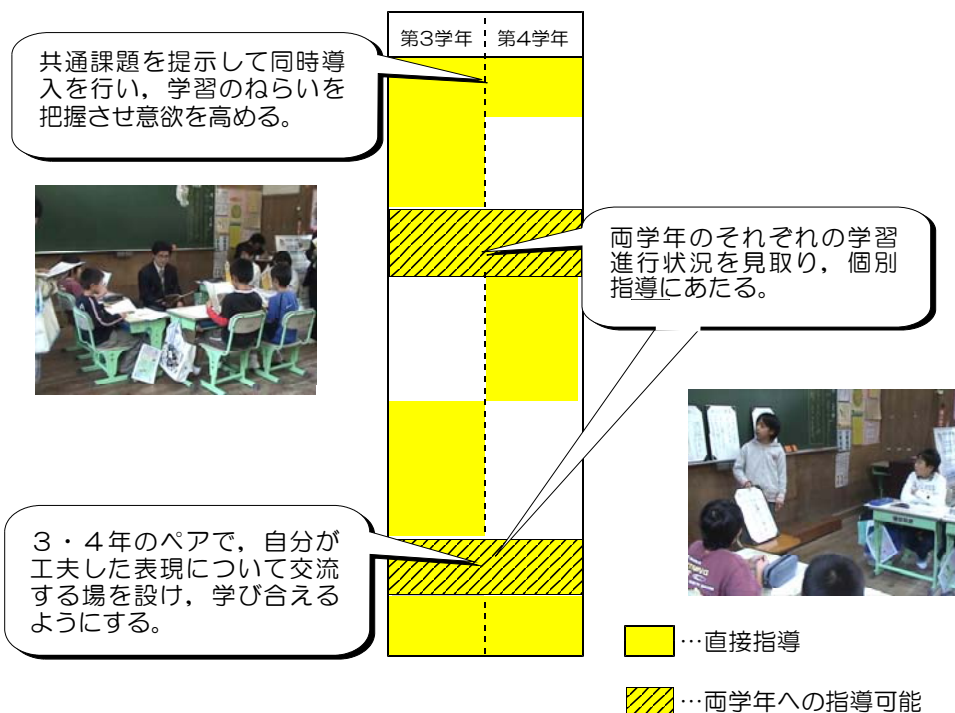
■複式授業づくりの視点

- 国語科において両学年を類似教材で指導することで、両学年の子どもによる学び合いの場を生み出し、学習の活性化を図ることができると考える。

■視点に対する具体的な手だて

- 類似教材指導計画の作成
同領域・類似教材を組み合わせた指導計画を編成し、これをもとに両学年とも説明文教材による学習を行う。「ふるさと若松の『ひみつ』を伝え合おう」という共通の学習目標を立て、各教材文の効果的な表現の工夫等を読み取り、自分の作文に生かす学習活動を展開する。
- 同時導入・同時終末の位置付け
同時導入を行い、共通課題の下にそれぞれの学習を進めていくことを確かめさせる。また、同時終末も位置付け、互いの学習の深まりを実感できるような場とする。
- 両学年の子どもが交流する場の位置付け
類似教材指導の特長を生かし、両学年でペアを組み、互いの作文を聞き合い気付きを交流して、学びを深められるような場を位置付ける。

【指導過程の概略】



■プラス発想のポイント

- 複式学級における授業では、直接指導できる時間が半減すると思われるがちである。しかし、類似教材の指導計画で学習を進めることで、両学年を同時に指導できる時間を設けることが可能となり、直接指導できる場を生み出すことができる。
- 類似教材を組み合わせた指導計画に基づいて、関連のある学習を展開し、交流場面を位置付ければ、異学年構成だからこそその学習の深まりが期待できる。

「ガイド学習」を積極的に活用した実践例（5・6年国語）

五島市立浜窄小学校 第5学年（7名）・第6学年（8名）

■児童数（全38名）

<H17年度>

	1・2年	3・4年	5・6年
人数	7	16	15

○福江島の西、三井楽半島に位置する。

○古くから農業・漁業が盛んである。

■複式授業づくりの視点

○一方の学年に直接指導をしている際、もう一方の学年に対しては、自分たちで学習活動が進められるようにする教師の間接的な働き掛けが大切になってくる。そこで、ガイド学習を取り入れることにより、子どもは、自主的・主体的な学習態度を身に付けることができる考える。

■視点に対する具体的な手だて

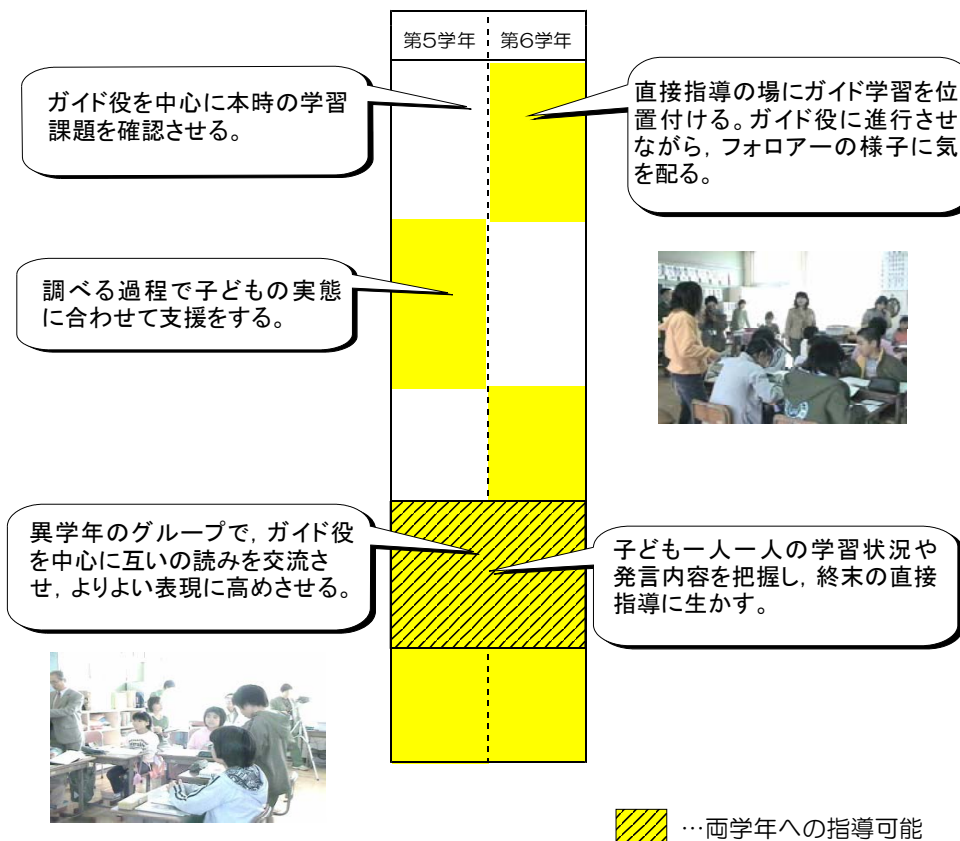
○ガイド役とフォロアーの育成

すべての子どもがガイド役を経験できるように配慮する。ガイド役、フォロアーのどちらにも、学習への見通しや学習内容と手順、話し方や聞き方といった学習のきまり等を十分に理解させておく。また、どの子どもも自信をもって発表できるように、自分の考えをノートにまとめさせるようにする。ガイド役には、毎時間の学習の進行表をもたせ、円滑に学習が進められるようにしておく。

○学習の進行表の活用

子どもの実態に応じた内容や表現に配慮しながら、できるだけ単元や1単位時間ごとの学習内容に合わせた学習の進行表を作成する。

【指導過程の概略】



■プラス発想のポイント

○ 間接指導の場は、相互に学び合う自主的・主体的な学習態度を身に付けることができる絶好の機会である。学級の実態に合わせて作成した学習の進行表を活用しながら、共同で学習する学び方を定着させることにより、子どもは、自信をもって課題に取り組むことができる。

○ 異学年によるグループ学習を意図的に位置付ける。子どもには、互いの考えを認め合い、学習をさらに深める場となる。また、教師には、子ども一人一人の学習状況を把握し、その後のより適切な支援に生かすことができるよさがある。

【指導の概要】

5年「短歌と俳句を味わおう」 6年「思いをこめて読み深めよう」

第5学年のねらい

○好きな俳句を選んで読み味わい、自分なりの読み方を工夫することができる。

第6学年のねらい

○ぼくとイナゴがどんな関係であるかを考えながら、自分なりの読み方を工夫することができる。

第5学年 学習の展開	教師	第6学年 学習の展開
<p>①つかむ（5分）</p> <p>○自分が選んだ俳句を確認する。 ※家庭学習で視写をさせ、すらすら読めるようにさせておく。 ○学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>好きな俳句を読み深め、自分の思いが伝わるような読み方を工夫しよう。</p> </div> <p>②しらべる（20分）</p> <p>○情景を読み味わう。 ○辞書を使って、自分なりの解釈をする。 ○自分なりの解釈にあった読み方を工夫する。 ※前時に考えた読み方の工夫点をまとめたカードを提示して、ヒントにさせる。</p> <p>③たしかめる（3分）</p> <p>○自分なりの解釈を発表し、確認し合う。</p> <p>④ふかめる（10分）</p> <p>○自分なりに工夫した読み方を発表する。 ※異学年交流により、互いに認め励</p>		<p>①ふりかえる（6分）</p> <p>○前時に学習した詩「イナゴ」について、まとめたことを確認する。 ※「イナゴ」と「ぼく」の対比やその二つをも包み込む自然の豊かさについてふりかえらせる。</p> <p>②つかむ（2分）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>ぼくとイナゴの関係を考えながら情景が伝わるような読み方を工夫しよう。</p> </div> <p>③しらべる（14分）</p> <p>○自分なりの読み方の工夫する。 ※前時に5年生が考えた工夫も参考にさせながら、ノートに視写した詩に表現の工夫を書き込ませる。 ○個人で練習する。</p> <p>④たしかめる（6分）</p> <p>○ペアで練習する。</p> <p>⑤ふかめる（10分）</p> <p>○自分なりに工夫した読み方を発表する。 ※異学年交流により、互いに認め賞</p>

ましてもらうことで、より工夫した読み方を追究させる。

※本時のねらいに沿った評価用紙を準備し、一人一人の読み方の工夫を見取る。

⑤ふりかえる（7分）

○本時の振り返りをする。
○家庭学習と次時の学習を知る。
※工夫した読み方を家の人にも聞いてもらい、感想をもらうように伝える。

賛してもらうことで、より工夫した読み方を追究させる。

※本時のねらいに沿った評価用紙を準備し、一人一人の読み方の工夫を見取る。

⑥ふりかえる（7分）

○本時の振り返りをする。
○家庭学習と次時の学習を知る。
※工夫した読み方を家の人にも聞いてもらい、感想をもらうように伝える。

…両学年への指導可能

■複式授業づくりにかかるよさ

○ 今回の実践では、5年生においては、前時に本時の学習のねらいや内容について予め子どもに知らせる場を位置付けた。このことにより、課題をつかむ段階においても、間接指導が可能となった。

○ ガイド学習が定着してきたことで、両学年同時にガイド学習を位置付けることが可能となった。5年生には、「声の大きさ」「リズム」「間のとり方」等の聞く視点を明確に意識させることで、互いの読み方の工夫点を進んで見つけようとする姿が見られた。また、6年生には、自分なりの考えをしっかりとノートに書き込ませておくことで、ガイド役を中心とする話し合いが活発になり、より工夫した読み方に高めようとする姿が見られた。

教師が子どもの具体的なアドバイスの様子を見取り、終末の振り返りの場で紹介することにより、子どもは、互いの学びのよさについて共有化を図ることができた。

学習を深めるための手だてとして、上学年と下学年のグループ学習の場を組織した。より工夫した読み方に高めようと、両学年が互いのよさを学び合うことで、学習集団としての信頼関係がさらに深まった。



複式授業の学びを生かした小・中合同授業の実践例 (小5・6年, 中3年音楽)

五島市立椏島中学校 第3学年(4名)

■生徒数 (全9名) <H17年度>

	1・2年	3年
椏島中	5	4

- 五島市の北東に位置し、福江港から約16km離れ、1日3往復の定期船が島民の海上交通手段となっている。
- 漁業が中心で、島民の多くが関連した仕事で生活を営んでいる。

■複式授業づくりの視点

- 中学校3年生は、小学校6年間で複式授業での学びを経験してきている。本実践では、その学びを生かし、小・中での合同授業を実施することにより、多様な考えや新たな視点による発想等に触れさせることができ、授業の活性化を図ることができると思う。

■視点に対する具体的な手だて

- 学習指導要領の研究と年間指導計画の見直し・検討

両校種の学習指導要領解説-音楽編-の目標や内容の分析を行い、合同学習を実施した。また、小学校音楽科、中学校音楽科の年間指導計画に基づき、より効果的な学習が展開できると考えられる単元を編成した。

時間	内 容	形態
1	楽曲の復習、音符やリズムの確認 鑑賞して曲の概要を知る (小) をす (中)	別
2 (本時)	楽器の基本奏法の手本を示す/小グループで活動の見通しを立てる	合同
3	音楽の諸要素を考え演奏に生かす/アンサンブルの練習をする	合同
4	最終的なアンサンブルの練習及び発表をする/演奏者・指揮者の違いによる曲想の違いを感じ取り、自分たちの演奏に反映させる	合同

- 多様な考えや新たな視点による発想等に触れさせる

本実践では、次のような具体的な手だてをとった。

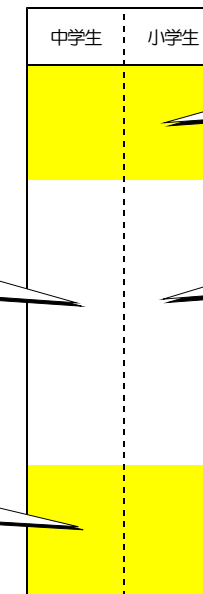
- ・中学生がリーダーとなり学び合うことができる場の設定をする。
- ・複式授業での進行表をもとに作成したワークシートを用い、中学生の進行により、小・中合同で意見の交流を図る場を設定する。
- ・中学生がリーダーとして活躍できるように少人数のグループを編成する。

【指導過程の概略】



個人のめあてや意欲を大切に、グループのめあてをつくること、小学生へのかかわり方等について指導する。

全員による発表を行い、自己評価をさせ、それぞれのめあてが達成できたか確認する。



小・中合同で一つの作品を仕上げていくことへの期待感を高める。

中学生の指導の意図が十分に伝わるように机間指導を行う。また、円滑な意見の交流ができるように支援する。



…直接指導

■プラス発想のポイント

複式で学習してきた子どもたちは「互いに学び合う・教え合う」ということが自然にできる。この学習では、そのことを大いに生かすことができる。

- 中学生はリーダーとして、小学生はフォロアーとして、それぞれの役割を意識し、活動を円滑に進めることができる。
- 中学生は、相手の立場や気持ちを考えたり、支えたりする活動を通して、リーダーとしての自覚をもつことができる。

【指導の概要】

『音の響きあいを楽しもう』～ マリンバのアンサンブルを通して～

中学校3年のねらい

○音楽的諸要素を含む考察を加えながら、楽器の特徴を生かした効果的な演奏を工夫することができる。

小学校5・6年のねらい

○豊かな表現に気づき、音色の特徴を生かした表現を探りながら演奏することができる。

中学校3年 学習の展開	指導形態 教師の位置	小学校5・6年 学習の展開
<p>①つかむ (5分)</p> <p>○本時の活動のめあてを知る。</p>	一 斉	<p>①つかむ (5分)</p> <p>○本時の活動のめあてを知る。</p>
<p>音の重なりをよく聴いて、楽しくアンサンブルの練習をしよう。</p>		
<p>②しらべる (15分)</p> <p>○音の重なり注意到意して演奏する。</p> <p>○班活動のリーダーとして、班員の思いを生かすことができるようなめあてづくりをする。</p> <p>○班の活動計画を立てる。</p>	グ ル ー プ (パ ー ト	<p>②しらべる (15分)</p> <p>○中学生の演奏を聴き、音の重なり気付く。</p> <p>○中学生の進行により、班のめあてづくりに取り組む。</p> <p>○班の活動計画を立てる。</p>
<p>③たしかめる (10分)</p> <p>○楽器の基本的な奏法の手本を示し、小学生を支援する。</p>	ト	<p>③たしかめる (10分)</p> <p>○中学生の支援を受け、基本的な奏法を学ぶ。</p>
<p>④ふかめる (15分)</p> <p>○班のめあてにそった練習ができるように進行する。</p> <p>○各パートの仕上がり具合を見ながら、セクション練習の場を設定する。</p>	グ ル ー プ (セ ク シ ョ ン	<p>④ふかめる (15分)</p> <p>○個人練習と併せて、パートやセクションごとに演奏する。</p>

⑤ふりかえる (5分)

○班のめあてや進行の具合など自己評価をする。

⑤ふりかえる (5分)

○自己評価カードを記入し、めあてを達成できたかを確認する。

■複式授業づくりにかかるよさ

小・中の合同学習が可能となる指導計画を組み、学習形態や学習方法を工夫したことにより、次のような子どもの姿や変容が見られた。

○ 多様な価値観に触れることができ、互いの学ぶ姿に刺激を受け、共によいものを創り上げようとする意欲が高まった。

中学生は、小学生に対して自身の知識や技術を伝えようとするなかで、言葉や表現を工夫するなど、リーダーとしての自覚が深まった。それとともに、自身の知識や技術を高めようとする意欲も感じられた。

小学生は、中学生のリーダーとしての在り方や演奏技術の高さ、音楽的知識の豊富さに対して憧れをもち、学習者としての望ましいモデルとすることができた。

○本時における子どもの変容について

中 学 生	<p>①音の重なり注目し意欲的に表現することができた。</p> <p>②音楽の各要素を理解し、曲想に合う表現を工夫することができた。</p> <p>③自身の基礎的な音楽の知識を活用し、楽曲を分析することができた。また、楽曲に合うメロディーを創造していくことができた。</p>
小 学 生	<p>①より豊かな表現を求め、楽しく演奏に取り組むことができた。</p> <p>②楽器の音の重なりによって生み出される様々な響きを味わい、曲想に合う表現を工夫しようとするすることができた。</p>

※ 本文は、Webページ用に加工致しております。